

# 学習院大学史料館 ミュージアム・レター

Gakushuin University  
Museum of History

## Museum Letter No.43

発行日 ● 令和2年(2020)10月1日

もくじ

ごあいさつ	1
香川家文書と桂宮家旧蔵御宸翰	2
仙洞御所由来 麒麟住吉凶末廣	4
有栖川御流	6
昭和天皇直筆御製草稿	7
皇子たちの学用品	8



昭和天皇直筆御製草稿〔当館蔵〕

### ごあいさつ

学習院大学史料館では、秋季特別展として「筆が織りなす皇室の美」を開催いたします。新型コロナウイルス感染が続く中、秋からの大学の授業も、この原稿を執筆している8月の時点では、原則として遠隔授業によることが予定されています。その場合、学外の方々が大学に入構し、展示室で実際に史料などをご覧になることは残念ながらできません。

その代わりに、当館では初の試みとして、Web上で展示品を公開する予定です。これによって、ふだん学習院までお越しになることが難しい遠方にお住まいの方にも、天皇をはじめ皇室ゆかりの方々による筆に関連する史料の数々——この中には天皇自筆の書(御宸翰・御宸筆)、筆を使って描かれた絵画、皇族方が学習院で使用していた文房具など、さまざまなものが含まれます——をご鑑賞いただけることと存じます。また、島谷弘幸・九州国立博物館長による史料館講座も、オンラインで配信する予定となっております。詳しくは当館のホームページをご覧ください。

今回の特別展では色鮮やかな「麒麟住吉凶末廣」も公開いたしますが、これは、公益財団法人三菱財団から文化財修復事業のための助成をいただき、修復することができたものです。特別展と史料館講座の開催にあたっては、一般社団法人霞会館からは多大なご尽力を賜りました。展示物の所蔵者の方々をはじめ、展覧会の開催にあたりご協力いただいたすべての関係者の皆さまに、心からの御礼を申し上げます。

(館長 水野謙)

### 筆が織りなす皇室の美

筆は紀元前の中国で発祥し、仏教と共に日本へ伝来したと言われます。以後今日に至るまで筆は生活の中にあり、常に身近な存在でした。その役割は文字を書くこと、画を描くことにとどまらず、化粧などにも使われています。筆の種類もいわゆる筆の他に、「筆」という文字で表される万年筆や鉛筆も、広い意味では筆の種類に含まれると考えられます。

常に生活の中にあった筆。皇族の方々も筆を使って、様々なものを表現されました。特に天皇ご自身が認められた書は御宸翰・御宸筆と呼ばれ美術品としても貴ばれました。

本展覧会では、桂宮家旧蔵の伏見天皇御集「広沢切」、後水尾天皇御筆消息、靈元天皇御宸筆の和歌懐紙などを初めて公開いたします。また靈元天皇の書風を受け継ぎ有栖川宮家に伝えられた有栖川御流の流麗な書もご紹介します。

近代に至ると、西洋から万年筆や鉛筆が導入されました。皇室の方々もこの新しい「筆」をお使いになりました。大正天皇はご自身のお写真に万年筆でサインをされています。

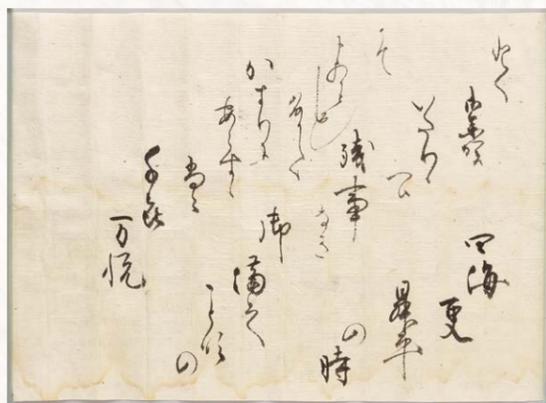
学校生活では鉛筆・筆箱といった文房具が欠かせません。明治末～大正期に学習院で学ばれた裕仁親王(昭和天皇)、雍仁親王(秩父宮)、宣仁親王(高松宮)、崇仁親王(三笠宮)ご兄弟ご使用の文房具や書初めなど、当館ならではの所蔵品もご覧いただきたいと思います。

そして、令和元年(2019)度歴史関係ニュースのベストテンに数えられた「昭和天皇直筆御製草稿」についても、この度初公開いたします。

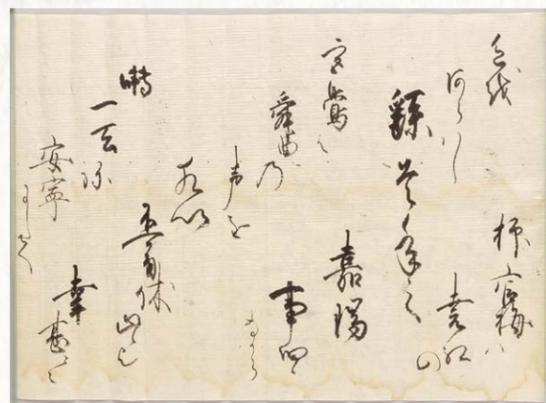
時代も内容も幅広い皇室関係の「筆の美」を是非ご覧ください。

(学芸員 長佐古美奈子)

# 香川家文書と桂宮家旧蔵御宸翰



後水尾天皇御宸翰 書状 (2枚共に) 縦38.3cm 横53.0cm



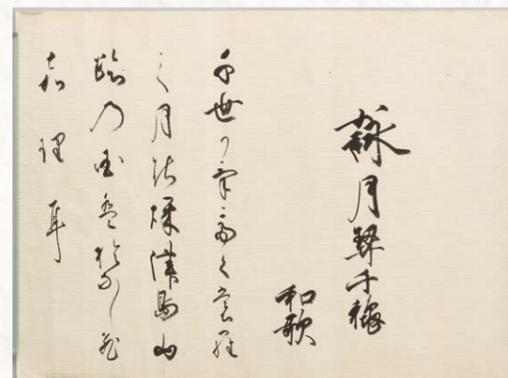
## 香川家文書

伯爵香川敬三関連の総計24837点にのぼる香川家文書は、平成30年(2018)に学習院大学文学部史学科に寄贈(一部寄託)された。当時当館客員研究員であった皇學館大学上野秀治教授により、昭和57年(1982)から皇學館大学にて整理が行われ、仮目録が作成されている。皇學館大学史料編纂所では、この成果を元に「香川敬三関係史料の世界」と題した史料展示が数度にわたり行われているが、桂宮家旧蔵御宸翰部分については、今回初公開となる。

香川家文書の多くは書簡で、香川敬三が長く皇后宮職を務めたことから敬三から皇后への伺いについての言上書、宮内省関係書類、辞令、日記、香川家家政関係書類、書画、写真など多岐にわたっている。敬三関係文書と共に須磨子夫人に関する書簡類、陸軍大佐として軍務に当たった継嗣櫻男、呉竹の内侍として宮中に仕えた長女志保子の関係史料も含まれる。英国留学経験のある志保子は、皇后の通訳や服飾に関わる御用を勤め、明治時代における皇后の西洋化に寄与したと考えられる。

## 桂宮家旧蔵御宸翰

香川家文書の中には、世襲親王家として江戸時代存在した四親王家の内、桂宮家(八条宮・常磐井宮・京極宮)の旧蔵になる史料群が含まれる。桂宮家は、正親町天皇の第一皇子誠仁親王(陽光院太上天皇)の第六王子智仁親王を祖とする。智仁親王は、学問文学への造詣が深く、後進の育成にも努力し、江戸時代の宮廷文化を育む豊かな土壌を整えた。また、古典籍の収集・書写などの活動にも力を注いでおり、その足跡は旧桂宮本として宮内庁書陵部に収蔵されている。特に、天皇の行幸を迎える場としての後の桂離宮の造営は、初代智仁親王、2代智忠親王による大事業であり、江戸時代前期における宮廷文化と同宮家の高邁な文化意識を伝えている。桂宮家は男系継承に恵まれず、3



霊元天皇御宸翰 和歌懐紙 縦46.1cm 横62.0cm



霊元天皇御宸翰 和歌懐紙 縦47.2cm 横64.4cm



霊元天皇御宸筆(左より) 蘆に鶴鶴、富士に日の出、鶴

代穂仁親王は後水尾天皇の皇子、4代長仁親王・5代尚仁親王は後西天皇の皇子、4歳で夭折した作宮・6代文仁親王は霊元天皇皇子、9代盛仁親王は光格天皇皇子、10代節仁親王と11代淑子内親王は仁孝天皇の皇子女である。桂宮家旧蔵史料群には和歌や書状、絵画など多数の宸翰が含まれるが、これは度々皇統から継嗣を迎えるなど、天皇と血統的に近い当主を擁した同宮家旧蔵史料の一つの特徴であろう。後水尾天皇から智仁親王に贈られた年賀の文などは、表具を施されることなく授受され、当時の様式を原状のまま伝えており、古文書学の様式論的にも興味深い。また今回新たに見出された広沢切など、桂宮家創立以前の中世段階における典籍の断簡や古文書類も含まれており、宮内庁書陵部に収蔵されている旧桂宮本資料との関係性も念頭に整理・検討が必要である。

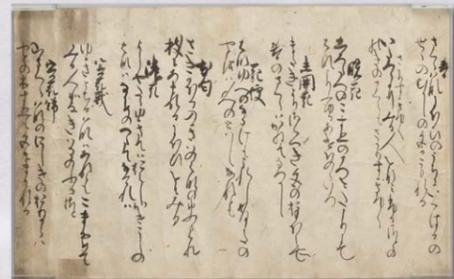
最後の当主淑子内親王が明治14年(1881)10月3日に薨去し、桂宮家は絶家とされたが、その際同家の整理に関与した敬三がこの史料群を譲り受け、香川家に伝えられたと考えられている。桂宮家当主と天皇との間における親しい交流を鮮やかに伝える、貴重な文書群である。

※2・3頁掲載資料は香川家より学習院大学文学部史学科寄託

(EF共同研究員 田中潤)

## 伏見天皇御集断簡(広沢切)

香川家文書の内、桂宮家旧蔵史料の中から確認された伏見天皇自筆になる自家集の一部、一紙(31.4×50.4)和歌九首である。伏見天皇は書への造詣が大変に深く、名筆の藤原行成筆国宝「白氏詩卷」の紙の継目に花押を加えるなど古典を愛玩した。また、自ら小野道風の「屏風土代」を臨摹するなど、名筆の数々を現代に伝えている。広沢切は、この伏見天皇自家集の自筆草稿と伝えられる古筆切である。『増補新撰古筆名葉集』後伏見院の項に「広沢切、杉原紙、巻物、父王の御哥、二行書」との記載があるが、この断簡も裏面には伝承筆者を伏見天皇皇子「後伏見院」とする墨書がある。反故紙を翻して用いた料紙らしく、薄く墨痕が確認されるが、反故の紙面は剥ぎとられ、新たに裏打ちが施されているため現状での判読は困難である。



広沢切の通例のように歌題に続けて上の句下の句を一行づつ二行に分けて記している。歌題は「春・さかりすきゆく・曙花・未開花・花便・花句・隣花・寄花歌・寄花錦」の九題で、同題の御製は存在するが、九首いずれも『伏見院御集集成』に収録されていない、新出資料である。

(EF共同研究員 田中潤)

## 香川敬三

香川敬三は、天保10年(1839)11月15日に常陸国茨城郡下伊勢畑村(現茨城県常陸大宮市)の蓮田家に生を受け了介と称した。その後、隣村の神職の鯉沼家に養子入りして伊織と称し、少年期には藤田東湖に学んで尊王攘夷を志してその活動の中で謹慎処分を受けたこともあった。幕末には水戸藩士として上京し、その活動の中で岩倉具視の知遇を得ている。名前も変名の小林彦次郎を称し、後に香川敬三と称するようになった。戊辰戦争では岩倉具視の子具定の下東山道総督府に配属された。維新後は兵部省から宮内省へと転じ、岩倉遣欧使節団に随従した後は、皇后の側近として仕えた。明治以降の敬三の業績について皇學館大学史料編纂所編『図録・香川敬三関係史料の世界』の総合解説は、「近代的な皇室を築き上げるために、法制面のみならず実務面でも大きな役割を果たした。殊に、前近代においては前面に出ることが殆どなかった皇后の地位や役割を、天皇と同等に引き上げることに尽力したのである。敬三は歴史の表舞台に立つことは殆どなかったが、明治の宮廷を考える上では欠くべからざる人物の一人である。」と評している。こうした事績により、伯爵を授けられ、長く側近にあった昭憲皇太后の崩御の後、その後を慕うかのように大正4年(1915)3月18日逝去した。

(EF共同研究員 田中潤)

# 仙洞御所由来 麒麟住吉図末廣



麒麟図



(修復前)



住吉図



(修復前)

京都の山科にある門跡寺院勸修寺が永く寺宝として保管していた「仙洞御所由来 麒麟住吉図末廣」は、平成28年(2016)に、勸修寺より当館へ寄託されたものである。当館では、平成17年度より数度にわたって、勸修寺から山階宮家関係史料の寄託を受け、調査研究を継続している。

勸修寺は、昌泰3年(900)に醍醐天皇が生母藤原胤子の追善のために造立。胤子の父・藤原高藤の諡号より勸修寺と号した。文明2年(1470)に焼失したが、天和2年(1682)に至り霊元天皇皇子・済深法親王が入寺したことにより再興された。霊元天皇は江戸初期の朝廷文化興隆に大いに功績があったことで知られる。同作品は、霊元天皇より同寺中興の祖である済深法親王に下賜されたとの由来から、以来同寺寺宝とされ、大切に保管されてきた。

しかし、経年による劣化が進み、破損・剥落が顕著となっていた。そのため修復をし、長く安定的に保存することが喫緊の課題であった。幸いにも令和元年(2019)度より公益財団法人三菱財団が文化財修復助成事業を開始し、申請・採択となり、この度修復が完了したことから、本展覧会において、広く公開する運びとなった。

(学芸員 長佐古美奈子)

本作品は、表面は霊獣の麒麟、裏面には摂津国の住吉大社が描かれる。両面とも緻密な描写と鮮やかな色彩が目を引き。麒麟と住吉を組み合わせた扇は珍しく、また朝廷の文化を表象するものとしても貴重な作例である。

よい君主の治世に現れるとされる瑞獣の麒麟。古代より吉祥のモチーフとして、工芸品の文様や装飾に表されてきた。「鳥獣人物戯画」乙巻(平安時代、京都・高山寺蔵)などにも登場するが、絵画の作例はそれほど多くはない。江戸時代の百科事典である『和漢三才図会』や『訓蒙図彙』に本図と似た麒麟の姿が確認でき、体は鹿、蹄は馬、尾は牛、五彩の身体に一本の角があるという。

青緑山水の中に立つ麒麟の身体は、群青に緑青の円文が、首や胴体の一部には薄い朱が施される。顔や尾などに生える毛は茶地に金泥や墨線が引かれる。身体から炎状の翼が生え、玉眼は群青の上に金泥を用い、厳しい表情を浮かべる麒麟の姿は画面上部にたなびく赤い瑞雲とともに、神聖な雰囲気を与えている。

裏面には歌枕として有名な住吉の風景が描かれる。住吉大社の景観は、江戸時代前期頃から同じく摂津国を代表する名所である四天王寺と共に屏風などにもよく描かれてきた。

遠山に霞がたなびき、眼下に広がる松原の合間には住吉大社の社殿、鳥居や太鼓橋がのぞく。奥に見えるのは神宮寺の宝殿か。胡粉の州浜に群青の海面には穏やかな波が立っている。松は一本一本枝葉まで丁寧に描かれ、画面をよく見ると様々な人物が潜んでいる。参詣する武士や良家の女性、僧侶、馬に乗る人物、太鼓橋に立つ人、浜辺で行楽する人々など。葦葺き屋根の家や海に浮かぶ小舟なども確認できる。和歌の神として信仰を集めた住吉の穏やかな光景が凝縮された一面となっている。

(助教 谷嶋美和乃)

## こもちひじり物語絵巻

下絵国結城藩主水野家に伝来した、「妙法院殿常胤 こもちひじり繪草紙 言葉書一卷」の極札を付す絵巻である。文久元年(1861)~同3年(63)頃の書とされる紀伊新宮藩主水野忠央(1814-65)による集書丹鶴書院の蔵書目録『新宮城書蔵目録』にも「こもちひじり 妙法院常胤親王筆 一卷」と記録が残されており、新宮水野家より結城水野家の養子となった水野直(1879-1929)との関係性が考えられる。

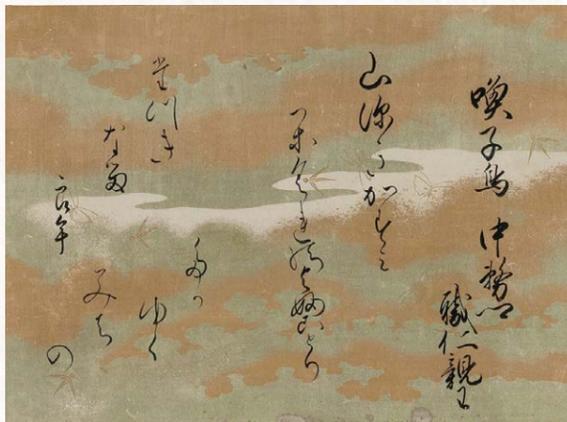
物語の内容は、「左大臣の御子中将は、一夜の逢瀬でちみょういんの娘である姫君との間に子(姫)を成し、自分のもとで育て可愛がる。それを妬んだ継母の策略によって姫は海へ沈められそうになるが、岩屋に住む聖がおろした袋に入れられ難を逃れ、数年聖と暮らすこととなる。姫を失い悲しみに暮れていた中将だが、その後舟遊びにでかけた際、岩屋の前を通りかかり姫と再会を果たす。そして姫は美しく育ち、東宮に参内する。」というものである。お伽草子の公家物、継子物に属する『岩屋の草子』などと似た展開が見受けられる。

挿絵は12場面あり、画面を御簾などで大胆に斜めに区切った室内描写、女性の衣の文様や後ろに大きく広がる裳、文様的な海や山の表現が特徴的である。庭や屏風に描かれた植物に見られる「辻が花」風の表現は、「白描源氏歌合絵巻」など白描の小絵に通じるものがある。16世紀頃の作と考えられるが、内容、制作者も含めて今後さらなる研究が求められる。文学的にも美術的にも注目すべき作品である。

(助教 谷嶋美和乃)



(水野家より当館寄託)



有栖川宮職仁親王筆 和歌懐紙〔当館蔵〕



有栖川宮職仁親王筆 和歌懐紙〔個人蔵〕

「宸翰の美流」とも表現された有栖川御流の歴史は、江戸時代の初期、華やかな寛永文化を現出させた後水尾天皇をその源流とする。

最も著名な有栖川御流による書跡は、有栖川宮職仁親王(1812-86)の染筆になる「五箇条の御誓文」であろう。明治天皇自身が新たな政治体制の基本方針を天神地祇に自ら誓うための言葉を、文字として表現したものである。注意してみると、有栖川御流の線の肥瘦や点画の筆運びなどは、一般的な楷書や行書とは一見して異なる。有栖川御流において重要なポイントの一つこそが、まさにこの見る側に独特な書体であると感じさせる「書風」の表現なのである。そして、その独特な書風が象徴的に表現するものこそが、天皇が書いた書体、つまり「宸翰」の書風であった。

江戸時代初期、後陽成天皇の後を受け、歌道に精進した後水尾天皇は、和歌を表現する手段としての書にも深い造形を示した。碩学の誉れ高い智仁親王や公家衆から和歌や書の指南を受けて研鑽を積んだ天皇は、中世以来、和歌の道において重視された古今伝授を継承する。そして後水尾天皇の下で整理、体系化された和歌の秘伝の伝授は、御所伝授として歌人の羨望の対象となり、天皇を頂点とする宮廷文化の核となった。

この和歌の伝授に連動するように後水尾天皇により編み上げられたのが、後に有栖川宮家に継承され、有栖川御流の源流となる「勅伝書流」であった。書の世界には、平安時代の三筆・三蹟以来の伝統を基に、国家的な重要書類などを執筆する際に大切な事柄を、秘伝として継承する「書役」の家が存在した。三蹟の一人藤原行成の末裔になる世尊寺家であり、その伝承を継承した持明院家である。古代以来継承された書の秘伝の伝授についても後水尾天皇は和歌の伝授同様に、整理・再構成・体系化をはかり、天皇から、自らの皇子など天皇・皇族・血縁に当たる一部の上級公家のみが継承できる伝授体制を構築した。これが勅伝書流と呼ばれるものである。天皇の書いた文字として公的な性格を持つ勅額や、錦の御旗の字形の染筆には、必ずこの伝授を受けていることが必要とされた。この勅伝書流が有栖川御流へと変遷する上で重要な位置を占めたのが、後水尾天皇の皇子であり、有栖川宮家に御流を根付かせた有栖川宮職仁親王の父帝霊元天皇であった。

霊元天皇は伝授を構成する秘伝の要素の内に、染筆に際しての踏まえるべき書式の秘伝とともに、自らが得意とし、後の有栖川流に見られる典雅な書風をも組み入れた。この独特な書風による書体こそが天皇の文字であるという道筋をつけたのである。

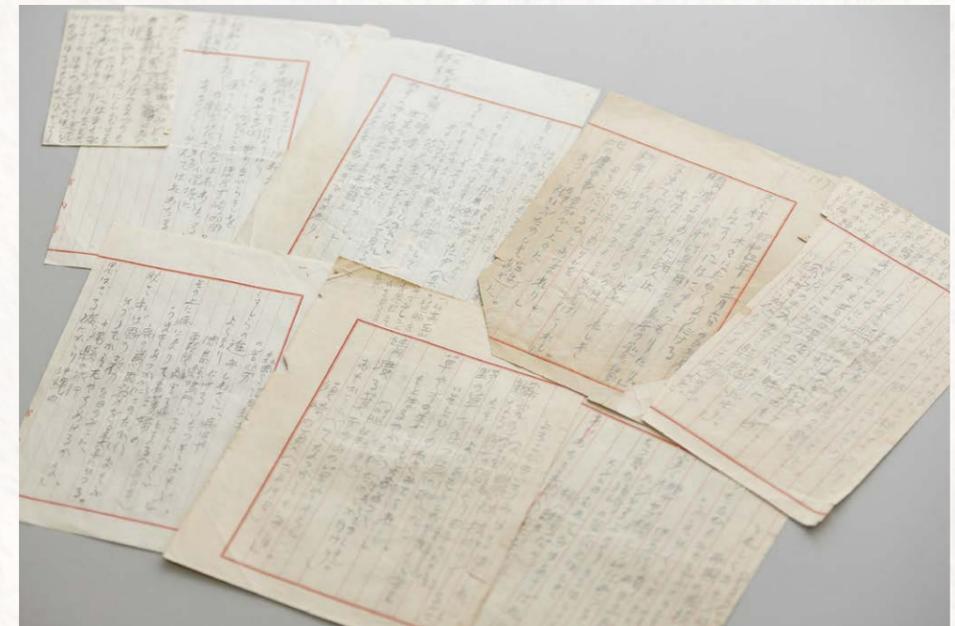
江戸時代中期以降皇統における皇男子の誕生は減少し、書の伝授を受け得る皇族の数が減少した。その一方で、霊元天皇以来の男系により安定的に宮家を継承し得た有栖川宮家は、勅伝書流の伝授許認可権を持つ天皇家から書の伝授を預かる形で維持継承をはかり、和歌と共に家学として御流を伝え、幕末の職仁親王は明治天皇の書の師範を務めた。

明治維新により、天皇の書を象徴する有栖川御流の伝授はその役割を終えたが、天皇家ゆかりの書風として、御流は高松宮妃喜久子殿下に継承され、現在は常陸宮妃華子殿下、秋篠宮皇嗣殿下が伝えておられる。



有栖川宮職仁親王筆 一行書〔個人蔵〕

(EF共同研究員 田中潤)



昭和天皇直筆御製草稿〔当館蔵〕

「御名御璽」。近代の日本において御真影とともに、天皇の姿を広く人々に想起させた言葉である。現代でも菊花・桐花・旭日・瑞宝・宝冠の各大綬章や文化勲章などの勲記、総理大臣や認証官の官記、公布される法律や政令、大使の信任状、外交・儀礼などに際し交換・賜与される御写真に、陛下は御名前を自署される。日本国憲法下において、象徴としての陛下が自ら筆を執って書かれる文字は、公的なお立場としては、御名前の二文字に限られるのであり、政治的・社会的に見ても天皇の御署名の持つ意味は極めて重いといえる。一方で新年の宮中歌会始の儀に際し、披講される陛下の御製懐紙は御自筆であり、公的な儀式において確認される数少ない宸筆の文字である。

ここで紹介する「昭和天皇御製草稿」は、象徴としての天皇のお立場において、公的に書き記された御署名の文字の背後に広がる、昭和天皇のお姿を伝えるものである。この草稿は宮内庁用箋など、凶事以外に用いられた朱棹の罫紙に、濃い目の鉛筆を用いて、詞書と合わせて約252首の御製が書かれている。詠まれた時期が確認できるものでは、昭和50年代の後半から昭和62年(1987)の期間にわたる。歌題とされた地域や対象の異なる歌が、筆致を変えずに続けて書かれている箇所もみられ、歌を詠んだその場その場で書き留めた草稿ではなく、それらの草稿をある程度の歌数がまとまった段階で書かれたものであろう。

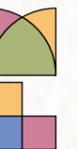
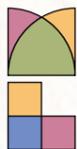
印象的なのは、書き記された用紙である。朱棹の宮内庁用の罫紙のみではなく、葉書サイズのメモ紙を丁寧に貼り継いだ上に書かれた文字もみられる。こうした点からは、上奏用に用いられた封筒を切り開き、裏面に御製の推敲をしたと伝えられる明治天皇の姿が想起される。昭和天皇自身も常に明治天皇の事績を念頭に置いていると述べておられ、折に触れて歌を詠まれた昭和天皇の姿には、多忙な公務の中で多くの歌を残された明治天皇の姿が重ねられよう。

また詠歌に際しての言葉遣いには、古典を踏まえた推敲の跡が各所に見受けられ、例えば「空はれて(天の原)ふりさけみれば那須岳はさやけくそびゆあづまやよりに(高原よりに)」の御製については、朱棹罫紙の欄外に「一、天の原とすれば萬葉集と同様になるおそれあり。」といった記載がみられる。

最後に、鉛筆で書かれた文字表記についてみていきたい。昭和59年に放映されたNHKの「皇居」という番組では、昭和天皇が勲一等の勲記に毛筆で署名をされる場面が映し出された。昭和天皇は、御名前の「裕」の文字の運筆について注意を払っておられたとのエピソードも伝えられている。この草稿の中でも、漢字については、櫻・殘・綠・縣など、正字体を正確に書き記しておられる。

平成になって編まれた昭和天皇の御集に収録される御製誕生の舞台裏と、高齢に達してもなお歌への探究を続けておられた昭和天皇の姿を伝える貴重な資料である。令和元年(2019)、牧野名助氏より受贈。

(EF共同研究員 田中潤)



# 皇子たちの学用品

明治41年(1908)1月、裕仁親王・雍仁親王・宣仁親王の三皇孫(皇子)は、父である皇太子嘉仁親王(大正天皇)から金製の鉛筆入れを授けられた。同年4月に学習院初等学科へ入学した裕仁親王は、始業式の日には皇太子妃節子(貞明皇后)から、硯や文鎮等の文房具一式を贈られている。叔母の常宮昌子内親王に対面した際には銀製の文房具一組を、皇后(昭憲皇太后)からは蒔絵文箱や懐中硯箱を…。『昭和天皇実録』をひもとけば、学齢期にあった裕仁親王には文房具類が折にふれて贈られていたことがうかがわれる。

当時の学習院長乃木希典は“質素”を重んじていたため、金銀製の文房具を学校で使用することはなかったであろう。その教えは大正期にも引き継がれたと見え、雍仁親王が毛筆を入れていたのは図工の課題作品と思しき箱であるし、宣仁親王の色鉛筆箱は白木造りである。舶来品と見える鉛筆なども残されているが、身の周りには簡素な学用品も用いられていた。

しかしながらその一方で、蒔絵の施された漆塗りの鉛筆箱なども使用されていた。この箱はランドセルの側面に嵌め込んでベルトで固定するようになっており、ぴったりのサイズに調製されているため、端の損傷が著しい。当館に伝わる3点の内一つは菊の絵柄で、花開く一輪の下に膨らみかける3つの小さな蕾は三皇子を思わせる。2点目には銀を撒いた月と瓢箪、3点目には桜と日章旗があらわされており、日月の対をなす意匠となっている。桜模様の箱の底には紙が敷かれ、おそらくは宣仁親王自身が芯を削り出したのであろう鉛筆が7本、残されている。

大正3年(1914)に初等学科を卒業した皇太子裕仁親王は、その後恒例として、卒業生のうち中等学科の優等生1名へ銀時計を、初等学科には2名へ「製図器械」を授与～台賜～した。地図を正確に引き、図面を読み取る技術は、将来軍人となるよう教育されていた当時の学習院学生にとって、磨くべき技能のひとつであった。裕仁親王は皇族の卒業生に対面した折にも製図器械を贈っている。下の製図用具は、宣仁親王が所持していた内の一つである。



高松宮宣仁親王所用 鉛筆箱 明治40年代～大正初期〔当館蔵〕



高松宮宣仁親王所用 色鉛筆箱 大正4年頃〔当館蔵〕



高松宮宣仁親王筆 写生画 大正2年〔当館蔵〕  
初等学科2年時に描いた色鉛筆画で、海や山は数色を織り交ぜて色されている。右は日付から、避寒滞在先の沼津風景とみられる。



高松宮宣仁親王所用 製図用具 大正初期〔当館蔵〕

(EF共同研究員 戸矢浩子)

## 学習院大学史料館からのお知らせ

令和2年度学習院大学史料館秋季特別展

### 「筆が織りなす皇室の美」

【主催】 学習院大学史料館

【共催】 一般社団法人 霞会館

【協力】 学習院大学文学部史学科

\* 学習院大学では、感染症拡大防止策として入構を制限しているため、当展示会は動画配信による公開といたします。下記URLよりホームページをご覧ください。

<https://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua/>

【動画配信期間】 令和2年10月15日(木)～12月5日(土)

【関連講座】 第91回学習院大学史料館講座

### 「宸翰の鑑賞—時代とその風格を味わう—」

講師：島谷弘幸氏(九州国立博物館長)

\* 本講座は11月21日(土)～12月5日(土)の間、当館ホームページにて動画を配信いたします。

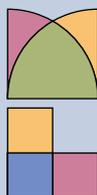
ミュージアム・レター 第43号

令和2年(2020)10月1日発行

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

電話 03(5992)1173

FAX 03(5992)9219



Gakushuin University Museum of History  
学習院大学史料館

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>